

平成 30 年度学校評価結果報告書
(中間評価)



広島県立福山葦陽高等学校
(定時制課程)

目 次

1 自己評価結果

(1) 平成30年度自己評価シート（中間評価）・・・・・・・・・・ 3

(2) 平成30年度自己評価シート（中間評価まとめ）・・・・・・・・ 7

2 学校関係者評価結果

(1) 平成30年度学校関係者評価シート（中間評価）・・・・・・・・ 8

平成 30 年度自己評価シート（中間評価）

校番	12	学校名	広島県立福山葦陽高等学校	校長氏名	小林泰崇	全・定・通	本・分
----	----	-----	--------------	------	------	-------	-----

※評価基準[A：計画はとても順調に進んでいる。 B：計画は概ね順調に進んでいる。 C：計画はあまり順調に進んでいない。 D：計画は全く順調に進んでいない。]

学校経営目標					
達成目標	本年度行動計画	評価	理由	担当部等	
1 考え抜く力の育成					
1) 基礎学力の定着を図る中で、学んだ知識を活用しながら主体的に問題を解決していく力	a) 授業のユニバーサルデザイン化により、学習習慣の育成と基礎・基本の定着を目指すと同時に、個々の生徒の進路ニーズに合わせた教材作りを行う。	B	<ul style="list-style-type: none"> ・ 標示用カードを使用し、授業の流れを黒板に掲示することで、学習習慣の定着を図っている。 ・ 1・2年次生については国英数の三教科で基礎力の定着度を継続して観察している。3・4年次生は各自の進路に合わせた教材を作成し、個別指導を行っている。 	教務部	
	b) 基礎・基本の定着を図る反復学習を定期的に行うとともに、知識を活用する力の育成を目指した授業づくりを進める。	B	<ul style="list-style-type: none"> ・ 現在考査実施3回目であり、取組途中である。 ・ 全教科で「まとめ」の時間を作り、知識の活用を目的とした演習問題に取り組んでいる。 		
2) 学んだことをキャリア形成の方向性と関連付けながら、粘り強く学び続ける力	c) 各検定の情報提供と指導により受検への意欲を高める。希望者への個別指導及び不合格者への事後指導を教員間（教科担当及び担任等）で連携して行う。	C	<ul style="list-style-type: none"> ・ 2学期中間考査時点での受検者（予定を含む）は、漢検0名、英検3名、情報検定4名である。 	教務部 進路指導部	
	d) 「葦陽定時学びのスタイル」の早期実現を目指し、学習と就労の両面から支援を工夫していく。低年次から担任・保護者・JST・公共職業安定所・就労支援機関等との連携を深めていく。また、面接指導を通して生徒の実態把握に努める。	B	<ul style="list-style-type: none"> ・ 卒業予定者 20名の進路実現に向け、職員協力を得ながら個別対応に力を入れている。 就職希望者 6名 進学希望者 13名 就労継続 1名 ・ 就労状況調査 (9/6 実施) 就労率は73% 昨年同期比 1%up ※数値以上に生活面の充実が課題となっている。安定した就労と学校への定着を目指している。 ・ 「葦陽定時学びのスタイル」である学業と就労の両立へ向けての支援の充実を図っている。 	進路指導部	

【評価結果の分析】

- a) 国語・数学・英語の基礎的・基本的な分野を毎回定期考査に出題し、通過率 50%を目標に取り組んでいる。現在、6割程度の通過率である。一定の時間をとって単語の書き取りや計算問題等、基礎的な問題の反復学習を取り入れることで、導入時における生徒の集中力を高めている。
- b) 国語・数学・英語の活用問題通過率 40%を目標に取り組んでいる。教科でバラつきがあるが、平均すれば4割程度である。定期考査では全教科で出題している。まとめに重点を置いた学習プリントを作成したり、振り返りシートをまとめや導入時に使用したりして、生徒が授業のポイントを把握しやすい教材づくりの工夫を行っている。

- c) 漢字検定の校内受検がなくなったことにより、受検人数が減少している。情報提供を行い、希望者には指導していく。英語検定は個別指導を手厚く行い、合格者を増やしている。しかし、全体として数は大きく減っていることもあり「C」評価とした。
- d) 概ね計画にそって指導を進めているが、卒業予定者の内複数名は、出席十分でなく進路決定へ向けての動きが遅れている。個別支援が必要な生徒も複数あり支援機関との連携などをすすめている生徒もある。就労率は伸びつつあるが「葦陽定時学びのスタイル」の確立のため安定した就労と学校への定着については、数値だけでなく個々に生活の向上、充実を図っていく必要がある。

【今後の改善方策】

- a) パターン学習を適宜取り入れることで特別支援が必要な生徒が安定して学習に取り組むことができるスタイルを確立して行く。また、生徒指導部と連携し、授業における禁止事項を視覚化して示すことで落ち着いて学習できる教室環境づくりに取り組んでいる。
- b) 普段の授業でも、考査等で文字の配列や問い方が変わると対応できない生徒もいるため、知識の活用の仕方そのものを繰り返し指導する必要がある。また、活用問題そのものの質を高める工夫も今後は行っていく。
- c) 情報検定の種類を精選したことで受検人数が減っているが、希望する生徒は熱心に取り組んでおり、情報処理技能検定表計算1級を取得する者も出ている。仕事をしながら学校に通う生徒が検定のために土日に登校する負担を考え、量より質の指導を行い、生徒の意欲や希望進路に沿った受検機会を提供していく。
- d) 卒業予定者の進路実現に向け、全職員の協力を得ながら一層個別対応に力を入れ、保護者への協力も仰いでいく。また、「葦陽定時学びのスタイル」である学業と就労の両立の実現に向けてサポートをしていく。就労体験発表、授業成果発表等で実践を相互に共有させていく取り組みに力を注ぎ、全体の意識の向上を図る。また、健全な勤労観の育成を促す教材の工夫と体系化を目指し、就労実態の把握にも努めていく。就労支援を要する生徒についてはステップアップを図るため放課後デイサービスやB型作業所への所属も選択肢として考えていく。

2 前に踏み出す力の育成				
3) 周りの人との関わり合いを通して、社会性を身に付け、自らの進路を切り開いていくことができる力	e) 教職員がカウンセリングマインドをもち、生徒に自発性・自律性・自主性が醸成されるように指導する。	B	・ 挨拶向上実績点数は、目標値をクリアしている。	生徒指導部
	f) 学校の設備（靴箱・駐輪場）の正しい使い方や、校内でのマナー等、基本的なモラルや社会性を身に付けさせる。	B	・ 月間遅刻数が1以下の生徒は目標値をクリアしている。	
	g) 学校のルールを周知し、問題行動を未然に防止する。また、問題行動があった場合には、どこが問題だったのかを理解させ、再発がないように丁寧に指導する。	C	・ 問題行動の発件数は18%減少している。	

【評価結果の分析】

- e) 「挨拶向上実績点数アンケート」において、「挨拶をしている」と答えた生徒の割合は80%であり、目標値と同じ値になった。昨年度の実績点数も80%であり、挨拶をする生徒が一定数いることが伺える。
- f) 月刊遅刻数が1以下（4ヶ月で4以下）の生徒の割合は28%であった。目標値である25%よりも3%上回った。
- g) 前年度の問題行動発件数は66件であり、今年度は、54件であった。18%減少している結果となった。しかし、同じ生徒が複数回指導を受けるケースがあり、粘り強く指導をしていきたい。

【今後の改善方策】

- e) 今後も、自発的に挨拶ができるように指導していく必要がある。挨拶を苦手としている生徒に対しても、校舎内外で教員から積極的に挨拶をすることが効果的と考える。
- f) 下足箱の使い方やマナーは改善しつつある。しかし、社会性を身に付けるためには、きちんと毎日遅刻をせず、生活習慣を整えさせる必要がある。欠課時数が多くなっている生徒も増えているため、朝のSHRから出席をし、すべての授業に出席をするよう促していく。
- g) 問題行動発件数は、昨年度より減っているが、複数回指導を受けている生徒がいる。保護者とも連携をし、継続して指導していく必要がある。その際、自らの行動について振り返り、今後どのように改善していきたいかを考えさせる指導を粘り強く取り組んでいく。

3 チームで働く力の育成

4) 「体験的な学び」を通して、社会的な視野を広げるとともに、他者と協働して課題に取り組んでいくことができる力	h) PTA とも協力しながら生徒主体の生徒会行事を実施し、多くの生徒が行事に参加する中で、自己と他者を尊重する態度を育成する。行事後に生徒の感想を募り、生徒の変容をみるとともに、次の行事に反映する。	B	<ul style="list-style-type: none"> 球技大会参加生徒 78 名 (109 名在籍中)。球技大会後のアンケートの結果、行事に満足している生徒の割合 85.9% であった。 学校アンケートの結果、学校行事へ満足している生徒の割合 81% であった。 	保健美化部
	i) 外部講師による講演や地域の文化施設を学びの場とする体験的な学習を通して社会的な視野を広げ、地域の課題を協力して解決する態度を育てる。	B	<ul style="list-style-type: none"> ハワイからの短期留学生を迎え、2年生と4年生で国際交流を目的とした授業を実施した。 地域の文化施設を利用した授業について、2学期中の実施に向けて計画している。 	教務部 生徒指導部
	j) 身の回りの整理整頓・毎月の清掃活動・校外清掃を通して、自己有用感や美化活動・ボランティア活動への関心、意欲を高める。	B	<ul style="list-style-type: none"> LHRで一斉清掃を実施し、周囲の整理整頓・美化活動への関心を高めることや責任感、達成感、自己有用感を得られる場面を作っている。 	保健美化部 生徒指導部

【評価結果の分析】

- h) クラス対抗の球技大会には、在籍生徒のうち7割以上の生徒が参加した。参加した生徒は、クラスメイトと協力してプレーをしたり、声をかけあったりしており、表情がいきいきしている生徒が多かった。行事後のアンケートでは、肯定的な回答をした生徒が85%であり、行事を通して、自己と他者を尊重する態度を育成につながっていると考える。
- i) ハワイからの短期留学生と合同で調理実習や福山にちなんだ折りバラ作りを授業で行った。英語学習の必要性とともに、話の内容や相手への接し方を学ぶ良い機会となった。また、進路講演会で学習成果を発表することで、全体で内容を共有し、次年度以降の意欲を高める契機としている。2学期末に広島県立歴史博物館を訪れ、地域の歴史を学び、資料としてまとめる授業を、地歴公民と国語がコラボして教科横断的に三修制生徒対象に実施する予定である。
- j) LHRで一斉清掃を毎月1回実施している。教室以外の場所（トイレや廊下、昇降口）も生徒は清掃に取り組んでいる。生徒全員で毎日使用する場所の清掃活動の時間を設定し、日常的に校舎内外の美化を生徒に呼びかけることで、美化活動への関心・意欲の向上につながる。

【今後の改善方策】

- h) 生徒主体の行事になるよう、行事後のアンケートに今後の行事内容に関する問いを入れ、企画力へつなげる。また、執行部を中心に生徒が準備する行事準備計画を立て、生徒とともに行事を運営していく。
- i) 三修制において2年次生と3年次生の合同授業を行い、異なる学年による教科横断的な学習を計画している。実施後、効果を検証し、他の学年でも実施できるか検討し、機会を増やしていく。
- j) 一斉清掃に限らず、日々の教室整備（学習環境の整備）に生徒が取り組めるよう、授業前後や放課後に生徒への声かけや確認を行い美化意識を高める。校外清掃では、生徒が自己有用感・ボランティア活動への関心、意欲が向上できるように計画・実施する。

4 働き方改革				
5) 業務改善の取組を進め、職員の在校時間を縮減する。	k) ・ 定時退校日の確実な実施を行う。 ・ 勤務時間管理システムを稼働させることで、勤務実態を把握し長時間勤務の改善につなげる。	A	・ 4月から9月までの平均が、一人当たり24時間で、目標はクリアしている。	校務運営会議
	1) 校務運営会議後の連絡会を機能化させ情報の共有化を図る。	B	・ 毎週の校務運営会議及びその後の連絡会で情報の共有化を定例会して行っている。	校務運営会議

【評価結果の分析】

k) 勤務時間管理システムを稼働させることで、勤務時間を自己管理することの意識化につながっているのではないかと考える。また、定時退校日に相互に帰宅を促すことで勤務時間に対する意識化が図られている。

1) 生徒及び校務に係る情報の共有化を図ることで、様々な課題に協働的に取り組むことにつながり、結果的に業務改善につながっていくと考える。

【今後の改善方策】

k) 勤務時間管理システムへの確実な入力呼びかけていくことで、勤務時間管理の意識化を更に図っていく。また、様々な業務に協働的に当たっていくことで業務改善を図り、超過勤務時間の縮減につなげていく。

1) 校務運営会議や連絡会での情報の共有化を更に推進していくとともに、日常的に職員室等で情報のやり取りが行われるように働きかける。

平成 30 年度自己評価シート（中間評価まとめ）

校番	12	学校名	広島県立福山葦陽高等学校	校長氏名	小林泰崇	全・定・通	本・分
----	----	-----	--------------	------	------	-------	-----

1 評価結果の分析と改善方策

■考え抜く力の育成

○基礎学力の定着と活用力の育成

・定時制の生徒にとって、基礎学力の定着と、それらを活用して課題を解決していく力の育成が喫緊の課題である。昨年度までは、基礎学力の定着は、定期考査の基礎力定着問題の通過率が上昇した割合としていたが、実質的な問題の通過率に変更した。また、活用問題も、定期考査の活用問題の無答率から、問題の正答数を対象にした通過率に変更した。基礎学力の定着に向けては、昨年度から行っている授業の一連の流れである“目標、ながれ、まとめ”を視覚的に黒板に示すことで学習習慣の定着と、反復学習による学習内容の定着を図っている。これらの取組によって、基礎学力の定着については一定程度の進捗はみられる。一方で、活用力の育成に向けては、活用場面の設定等のさらなる取組が必要である。

○学習意欲の向上

・各種検定試験において、新たな級や資格に挑戦する生徒の数を新たな指標とした取組を行っている。情報処理検定では上級の試験に合格し、英語検定試験でも合格者を増やすなど個別指導による成果をだしている。しかし、受験人数は昨年度に比べて大きく減少していることから、将来のキャリア設計と関連付けた呼びかけ等が更に必要である。

・卒業予定者の進路実現に向けては、組織として着実に取組を進めているところである。また、葦陽定時学びのスタイルである学習と就労の両立では、就労率が73%と去年同期比で1%ながら上昇している。引き続き就労に向けての支援を組織的に進めていく。

■前に踏み出す力の育成

○他者との関わりを通した社会性の育成

・挨拶は社会における人間関係構築の第一歩である。アンケートで「挨拶をしている」と回答した生徒の割合は80%であり、昨年度の実績値と同じであった。対外的に挨拶をしている生徒は一定程度いると考えられるが、日常的に校内における挨拶も行える生徒の育成に向けて、教職員が率先して範を示していく。

・遅刻者数については、月間遅刻数が1以下の生徒の割合が28%と、昨年度の実績値よりも3%上回っており、改善傾向がみられる。しかし、遅刻の常習者は依然として多く存在している。

・問題行動の発生件数は昨年度に比べて18%の減少となっている。しかしながら、複数回指導を受ける生徒数は例年とあまり変わっていない。個々の生徒に粘り強く指導を継続していく必要がある。

■チームで働く力の育成

○体験的な学びを通した協働性の育成

・球技大会や運動会など生徒会行事に約7割の生徒が参加している。他者と協働して行事に取り組む生徒の姿は生きいきとしている。行事後のアンケート結果は8割を超える生徒が肯定的評価をしている。生徒の変容は事後の感想文からも窺うことができる。

・姉妹校であるワイパフ高校の生徒及び教職員と調理や折りバラの体験を通して交流することで、社会的な視野をひろげるとともに、グローバルな感覚を身に付けようとする生徒も出てきた。

・毎月1回の一斉清掃を通して、身の回りの整理整頓や美化活動への意識を高めることに取り組んでいる。清掃の時間は協働的に取り組んでいる様子も窺えるが、日常的に周囲の環境美化に取り組めるように、日ごろからの教員の声かけや指導が一層求められる。

■働き方改革

○業務改善の取組

・9月までの時間外勤務時間の平均は24時間で、目標値に達している。職員間の情報の共有化を推進することで協働的に業務に当たることで業務改善が図られているのではないかと考えられる。

2 学校関係者評価結果を踏まえた今後の改善方策

様々な課題を持っている生徒が多く、一律での指導が難しい場合がある。個々の生徒状況を踏まえつつ、丁寧な指導を重ね、秩序と規律が守られ安心して学べる学習環境を整備していく必要がある。その根幹となる教育活動が授業改善である。基礎学力の定着を図るとともに、生徒が学んだことを社会で活用することができるように更に取組を進めていかなければならない。そのためには、教職員全体で課題意識を共有しながら、組織的・系統的な取組を継続し、生徒が自律的に学んでいける学校文化の創造に取り組んでいく。

平成30年度学校関係者評価シート(中間評価)

平成30年10月31日

校番	12	学校名	福山葦陽高等学校	校長氏名	小林 泰崇	全・定・通	〇・分
----	----	-----	----------	------	-------	-------	-----

評価項目	評価	理由・意見
目標、指標、計画等の設定の適切さ	B	<ul style="list-style-type: none"> ・目指す生徒像に沿って、「強く」「正しく」「美しく」に基づいた定時制教育を推進するための具体的な目標、指標、計画について有機的に設定されている。特に、新規に定期考査の国、数、英での基礎力定着問題、活用問題、それぞれの通過率を評価指標に設定し、指導計画に適切に反映されている。 ・志願者数が減少している理由として、定時制全体への進学者が減少しているのか、それとも葦陽高校の定時制への入学者が減少しているのかで、異なる学校経営計画になると思われ、少なくとも県東部での定時制入学者の推移と比較して、検討する必要があるのではないか。 ・中学校訪問で周知している「厳しい指導」というのは間違った方向ではないと思う。 ・三修制を選択している生徒が増加しているということであるが、この三修制の定時制と全日制の違いが分からない。
計画の進捗状況の評価の適切さ	B	<ul style="list-style-type: none"> ・具体的なデータに基づき、年度末の目標値をもとに中間評価時点での進捗状況が概ね適切に評価されている。 ・問題行動の発生件数が減少しているにもかかわらず、その内容からC評価にする厳しい評価になっていることは、課題意識の表れであり良いと思う。 ・検定試験の受験などは、生徒に自信を持たせることに繋がると思うので、生徒個々の状況を見ながら粘り強い取組みを継続していただきたい。
目標達成に向けた取組の適切さ	C	<ul style="list-style-type: none"> ・年度末における目標達成につながる計画的で組織的な取組がなされており、中間評価時点での適切な内容である。 ・「体験的な学び」の評価指標である「学校行事の満足度」・「社会的な視野の広がり」・「ボランティア活動への参加」などは、一つの行事や活動で測れるものではなく、年間を通した様々な取組みの結果なので、企画には手間のかかることが多いと思うが、頑張っていたきたい。
評価結果の分析の適切さ	C	<ul style="list-style-type: none"> ・各項目の評価に対し、具体的な事実に基づき、現状と課題が明示され、今後の改善方策につながる概ね適切な分析内容である。 ・定時制だから、この程度でもと云う分析が見られ、一般的な高校生の指導として、以下の表現について理解が得られるのか疑問に感じる。 「葦陽定時制学びのスタイル」の確立のために、個々に生活の向上・充実を図る。」 「挨拶をする生徒が一定数いることが伺える。」 「LHRで一斉清掃を毎月1回実施している。」
今後の改善方策の適切さ	B	<ul style="list-style-type: none"> ・評価結果の分析に基づき、各項目ごとに改善方策が示され、概ね適切な内容である。特に働き方改革では、職員室に集う職員が情報交換を日常的に行い、協働的に業務改善を図ることは適切な改善方策であると思う。 ・それぞれの項目に対して、よく練られた改善方策が示されてはいるが、いずれも今後の教員の取組みに係っており、教職員全体で課題を共有して、個々のスキルアップを図ることが必要である。
総合評価	B	<ul style="list-style-type: none"> ・昼間定時制ならではの機能的・機動的な取組に裏付けられた評価内容である。特に、学年横断的な取組により、生徒同志の絆が深まり、教育効果が上がっているように思う。年度末に向けて、定時制教育の更なる充実を期待する。 ・様々な課題を持っている生徒が多いと推察され、目に見える形での成果は上げにくいと思うが、この中間評価に満足することなく、社会人としての意欲が持てて、社会に貢献出来る生徒を育てるため、粘り強い取組みを継続されることを期待する。 ・個性的な生徒が多い中、一人一人に丁寧に対応してくれていることに感謝している。挨拶してくれる生徒もたくさんいるのでうれしい。